

マリアのシンテシラ

物語

後編

エリー

<再会>

ルーカス王子の願いどおり、花嫁を選ぶ舞踏会を開くことが城下町に告知されました。

\* \* \*

舞踏会の告知を知ったわたくしは、思わず高笑いをしてしまった。

いくらお金があって、取り巻きに囲まれても、伝統と権威がなければ貴族たちからは格下に見られてしまう。王子との結婚。それはこの国で一番の玉の輿。何がなんでも手に入れてみせなければ。

すると取り巻きの一人がわたくしの顔色を見ながらすり寄ってきた。

「ルーカスさまの肖像画を見たけれど、背が高くて、そのうえ整った顔立ちをしていらして、本当に素敵よね。きっとアランさまに似て強く、クリスさまに似て賢いかたなんでしょうね。アビゲイルさま以上にふさわしい方はいらっしゃらない。幸せになれること間違いなしだわ！」

「王妃になってもあなたたちのこと忘れないわ」

「ありがとうございます」

頭を垂れる取り巻きたちの前で、わたくしは最高のドレスを仕立てるため、仕立屋に採寸させた。

アッカーソン家は、毛織物、食品、魔技などの商人のグループの頂点に立つ豪商だ。財力で貴族たちに負けはしない。

その上、幼いころから磨き上げた美貌を持っている。王子の目にとまらないはずがない。

貧乏でろくなものを用意できない庶民の娘など道端の石ころ同然。

勝つのはこのわたくし、アビゲイル・アッカーソン。

\* \* \*

舞踏会の告知を知ったわたくしは、マリアにとってまたとない機会だと思いました。

占い魔女さまの予言は国を救う偉大な母。王妃こそふさわしいのではないか。

しかし、わたくしの期待に反して、マリアは舞踏会には全く関心を示しませんでした。

「王子さまが、なんの取り柄もないわたくしを選ぶはずがありません。しかし、クリス王のご命令ですから参加はします。でもドレスを新調しなくても大丈夫です。それより困っている人たちのために使ってください」

マリアの気持ちを優先させて教会に送り出すべきなのでしょうか。しかし、縁を切ることはためられます。

もしも王子がマリアを選んでくれたなら、わたくしは今度こそ喜んで娘を手放しましょう。王家に嫁にだしましょう。

\* \* \*

僕は、城下町の様子が気になってしかたがなかった。

いよいよ明日は舞踏会だ。

マリアは、来てくれるだろうか。

僕のことを覚えているだろうか。

このガラスの靴を見せれば、思い出してくれるだろうか。

僕は繰り返し、繰り返し、再会の瞬間を夢見続けた。

\* \* \*

舞踏会当日、シンプルな白いドレスに身を包んだわたくしは、お母さまに連れられてラビット城に入りました。

会場は光にあふれ、まばゆく輝いていました。

こんな晴れやかな場所は生まれて初めてで、どうしていいのかわかりませんでした。隣を見ると、お母さまも驚いています。

すると高らかな笑い声が響きました。

「アビゲイルさま、素晴らしいドレスですこと！」

アビゲイルさまと呼ばれた女性を見ると、確かに光り輝く黄金のドレスを着ていて、誰より目立っていました。王子さまは、きっとああいう女性を選ばれるのだろう。そう思っつつむいていると、兵士が近づいてきました。そして、わたくしの前で立ち止まりました。

驚いて顔を上げると、わたくしの顔をじっと見つめます。わたくしは、自分の目のことを思い出して、思わず横を向いてしまいました。

「赤と金の目、あなたが MARIA さまですね。さあ、こちらへ。ルーカス王子が呼びです」

自分の名前を呼ばれたわたくしは、驚いてしまいました。

お母さまの方を見ると、静かにうなずいていらっしゃいました。

訳の分からないまま、わたくしは兵士についていきました。

すると黒い髪に緑の瞳を持つ男性が立っていました。どこことなく、あの男の子に似ている気がしました。しかし、王子さまが城下町に一人ではいるはずがありません。わたくしは勘違いだろうと思いました。

「MARIA、来てくれて嬉しいよ」

そういうと王子さまは、微笑みました。優しく、寂しそうな人だと感じました。

「僕と踊ってください」

最初のダンスをわたくしと踊るなんて、そんなことがあってよいのでしょうか。

わたくしは返事に困ってお母さまを探しました。すると遠くで嬉しそうにうなずいていました。

。

王子さまの手に手を重ね、導かれるままに一曲踊りました。

すると先ほどアビゲイルさまと呼ばれた女性が近づいてきて、王子さまに頭を垂れました。ダンスの申し込みを待っているようでした。

わたくしは、わたくしなんか最初のダンスを踊ってしまった畏れ多さを今更ながらに感じて、胸がドキドキしてきました。

王子さまは、わたくしの元を去り、あの女性と踊るのだろう。そう思っていました。

しかし、女性を無視して、わたくしの腕を引っ張りテラスに向かって歩き出したのです。

振り向くと女性がすごい形相で睨んでいます。わたくしは心の底から怯えてしまいました。

テラスに出ると、王子さまと二人きりになりました。

すると王子さまが、ポケットから何かを取り出して、差し出しました。

「僕のこと覚えている？」

手のひらにのっているのは、あの日失くした右のガラスの靴です。わたくしは驚いて、反射的にうなずいてしまいました。

弱虫と言った相手が王子さまだと分かった今、早く謝らなければいけないと思いました。しかし、言葉が思うようにでてきません。

やっと言いかけたところで、王子さまがわたくしの手を取りおっしゃいました。

「マリア、僕と結婚してほしい」

神のしもべとなる決意をしているわたくしは、申し出を断るつもりでした。しかし、返事をする前に、クリス王がいらっしゃいました。

「ルーカス、その娘を選ぶつもりなのか？」

「はい！」

お母さまが近づいてきて、わたくしの肩に手を置きました。

「おめでとう、マリア」

状況に気づいた人々が集まってきて、口々にお祝いの言葉を述べ始めました。

お母さまも喜んでいて、みんなも祝福してくれている。わたくしは受け入れるべきなのでしょう。でも、わたくしの夢はどうなるのでしょうか。

<城>

庶民の娘がお城に入るのだから、いろいろなしきたりを学ばなければなりません。わたくしは、教えられるままに一生懸命覚えました。

なにもかも違っていて、絵本の世界に迷い込んでしまったような気分です。すべて夢で、目が覚めたらいつも通りの暮らしに戻っている。そんな期待と失望を繰り返して、忙しい日程をこなしていきました。

そして、とうとう結婚式当日になりました。

城下町で一番大きな大聖堂には、大勢の人々が参列していました。端の方でお母さまとお父さまも嬉しそうに微笑んでいます。

しかし、いつもわたくしに自信を与えてくださるお母さまとはここでお別れしなければなりません。これからは、一人で考え、一人で決めなければならない。そう思うと不安でたまりませんでした。

そんなわたくしの心配とは裏腹に、ルーカスさまは何がそんなに嬉しいのか不思議なくらいニコニコしていらっしゃいました。

式の最後に、神父さまが誓いの言葉を述べられました。

「汝を妻とし、幸せな時も、困難な時も、富める時も、貧しき時も、病める時も、健やかなる時も、死がふたりを分かちまで愛し、慈しみ、貞節を守ることをここに誓いますか？」

するとルーカスさまは、びっくりするぐらい自信に満ちて堂々と大きな声で言いました。

「誓います」

わたくしは、"新郎に誓います"と言わなければいけませんでしたが、求められていることにまったく自信がありません。心から信じている神さまに、確信の持てないことを誓ってしまうことに恐れを抱いて、どうしても言葉が出てきません。言葉の代わりに、ただ微笑みを返すことしかできませんでした。

神父さまは、わたくしの微笑みを了解の印と受け取り、式は滞りなく終わりました。

なんとか式を終えたわたくしは、控室で披露宴のためのお色直しをしておりました。本当に結婚するのだという実感が、今更ながらに湧いてきて、未来に恐れを感じて涙がこぼれそうでした。

すると猫人間の男性と女性が現れました。女性は、わたくしの姿を見ると、男性の後ろに隠れました。

「はじめまして、マリアさま。わたしは賢者イアン・ブーンです。よろしくねえ」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

わたくしは、イアンさまの後ろからじーっと見る女性が気になって仕方ありません。

「そちらの素敵な女性はどなたでしょうか？」

「ああ、こっちはわたしの妻のサリーです～」

「こっちなんて！！」

イアンさまの影から飛び出し、わたくしの前にサリーさんが立ちました。

「まあ偉大な人の妻同士、よろしくですう」

「こちらこそよろしくおねがひしますわ」

サリーさんが、わたくしの顔をじっと見つめています。

わたくしは目のことを言われるのではないかと恐れました。思わず下を向いてしまいました。

気まずい沈黙を破って、イアンさまがサリーさんに聞かれました。

「どうかしたのお？」

「マリアはいい子なのはわかるけど・・・ちょっとぼんやりしすぎよね。そんなんで城でやっていけるのかしら？」

「ルーカスが守ってくれるんじゃない？」

「どうかしら～？ お酒をやめただけって感じよ？ 期待できないわ」

「サリーは相変わらず手厳しいね」

「本当のことを言っているだけよ！」

わたくしははっきりものを言うサリーさんに驚きと尊敬のまなざしを向けました。

\* \* \*

マリアさまに挨拶を終えた俺は、サリーをつれて披露宴会場に戻った。

クリス王がニコニコと微笑んでいる。

「あのルーカスが酒をやめてくれたなんて本当にめでたい。それだけでも条件を飲んだ甲斐があったというものだ」

「そうですねえ」

喜びを分かち合っていると、全身黒づくめの男が近づいてきた。長いコートで羽が隠れているが、ライフ国際連盟から祝福に駆け付けてくれた鳥人間だろう。悪い人ではないが、どこことなく不気味な雰囲気を感じさせていた。

「クリス王、めでたい日にお招きいただきありがとうございます。貴国の加入もそう遠くないでしょうな」

「そうであればうれしいが」

クリス王が、顔をほころばせた。

「ところで、最近発明された魔技をつかった転送装置では、簡単に移動ができるとか。ぜひ帰る前に、ニニーム共和国にも足を運びたいものですな」

「わたしでよかったですらご案内しますが」

俺が申し出ると、クリス王が大きくうなずいた。

「メリル代表には、わたしから連絡しておこう。ぜひ、寄っていかれるといい」

そう言うと、俺たちは登場した花嫁と花婿に拍手を送った。

\* \* \*

ルーカスさまと一緒に城に戻ったわたくしは、ラビット城や城下町の代表者たちに紹介されました。

その中に、アビゲイルさまと呼ばれていた女性もいました。ニコニコとわたくしに近づいてきて、挨拶してくださいました。

「女は女同士、御一緒にお茶でもしませんこと？」

わたくしは、優しい態度に嬉しくなって誘いを受けることにしました。

そして、アビゲイルさんを中心とする女性のグループと一緒に別室に移動しました。

扉が閉まると、アビゲイルさんは、突然態度を変えました。

周りの女性たちも豹変しました。

ニヤニヤと意地悪そうな微笑みを浮かべています。

アビゲイルさんが、わたくしの顔を指さして高笑いされました。

「その気持ち悪い目はなんですか？ 赤と金だなんて、母親が悪魔に魂を売ったからにちがいないわ」

「わ、わ、わたくしのお母さまは立派な人です」

「どうかしら？ たいした財産もないくせに、いったいどんな汚い手を使ってだましたのかしら？」

「汚い手なんてなにも。どうして選ばれたのか、わたくしにも分からないのです」

取り囲まれて、わたくしの声はどんどん小さくなっていきました。

すると突然、アビゲイルさんとわたくし以外が床に倒れました。

わたくしはとっさに、床に膝をつき、倒れた人を起こそうとしました。

「きゃ！？ なに！？ 死んでいるの？ やだこわい！！」

アビゲイルさんがうろたえて部屋から逃げ出そうとしました。

するとサリーさんが入ってきて、逃げようとするアビゲイルさんの腕をつかみました。

「人が眠っているのか、死んでいるのか分からないなんて、とんだ世間知らずちゃんね」

「お、おまえなにさまのつもり！？ 猫人間のくせに！！」

「猫人間だからどうだっていうの？」

「アニマル連合ができたのは、わが国の王が寛大な心で猫人間たちを許したからでしょう。その恩をわすれたの？ 何の理由もなく攻撃してきたくせに」

「あーら、それをいうならあなたたちも同じじゃない。サドラー家はなににも悪くない。でも攻撃されたわよ」

「くっ・・・それはみんな苦しんで・・・」

「わたしたち猫人間だって同じだったわ。誰でも守りたいものがあるのよ。貫きたい信念があるのよ。それを踏みにじって従えたというなら、それはもう独裁者ね！ この国の国民とは言えないわ」

唇をかみしめ、怒りに震えるアビゲイルさん。

わたくしは二人の対立をハラハラと見守っておりました。どちらの言うことも正しく、どちらが悪いのかわたくしには分かりませんでした。

「マリア、ここにいても時間のむだよ。いきましょう」

わたくしは、サリーさんに手を引かれ、ルーカスさまのところへ戻ろうとしました。しかし、やはりどう考えてもおかしいのです。

「やっぱりわたくしは花嫁にふさわしくないのだと思います」

言葉にした途端、緊張の糸が切れたわたくしは床に座り込んでしまいました。

「あたしはそうは思わない。すくなくとも権力にひかれてここにいるわけではないでしょう。ルーカスと向き合う気持ちがある」

「わたくし、ここにいていいんでしょうか？」

「それを決めるのはあたしじゃない。マリア自身でしょう？」

「どうしてわたくしが選ばれたのか分からないんです。小さいころに一度会っているのですけれど、わたくし悪いことをしたのにごめんなさいも言わなかったのに」

「ルーカスがどう思ったのかは、ルーカスじゃないと分からないわ」

わたくしは、一度ルーカスさまに聞いた方がいいのか悩み始めました。

\* \* \*

俺は、鳥人間の使者を連れて、ニニーム共和国に旅立つため、転送装置の前に立っていた。

サリーが、当然のこととしてついて来ようとする。

しかし、マリアさまをルーカス一人に任せるのは心配だ。

「マリアさまのために、城に残ってくれないか。図書館も利用できるだろうし」

「しょうがないなあ」

頬を膨らませ、見送るサリー。

俺たちは、転送装置でホエール島のメリル代表の元へ飛んだ。

<好意>

明け方、ルーカスさまと同じベッドで目覚めたわたくしは、一変してしまった生活に戸惑いました。城にはお母さまも、クック神父さまもいらっしゃいません。眠っているルーカスさまの横で、左のガラスの靴を取り出し、一心に祈りを捧げました。

すると気配を察して、ルーカスさまが目を覚ましてしまわれました。

「こっちへおいでよ」

わたくしは祈りをやめて、素直にルーカスさまのそばに行きました。

ルーカスさまが、嬉しそうにクスクスと笑いながら、わたくしを抱き寄せました。

わたくしは思い切って質問しました。

「どうして花嫁に選んでくれたんですか？」

「マリアと結婚したかったからだよ」

「わたくしは何をしたらいいのでしょうか？」

「なにも。そばにいてくれるだけで僕はしあわせなんだよ」

しかしわたくしは全然幸せではありませんでした。不安になって、思わずポロポロ泣き出してしまいました。

「どうしたの。僕がなにか悪いこと言った？」

わたくしは懸命に首を横に振りました。しかし、涙を止めることはできません。苦しくなったわたくしは部屋を飛び出し、城の礼拝室に駆け込みました。

\* \* \*

マリアに拒絶された僕には、お酒以外に頼るものがなかった。

やっと念願がかなって会えたのに、僕のことを覚えてくれていたのに、なぜマリアは泣くのだろう。

僕はもうどうしていいのかわからなかった。

するとイアンさまの妻だというサリーという猫人間がやってきた。

「なにまた飲んでいるの。新婚そうそうだらしが無い。マリアはどうしたの？」

「知らない。どこかへ行ってしまった。いったい僕のなにがいけなかったんだ」

僕は悲しくなって泣き出してしまった。

「なさないわねえ・・・」

そんな僕を見捨てて、サリーはどこかへ行ってしまった。

\* \* \*

久しぶりに神さまに近い場所に来られて安心したわたくしは、疲れが一気に出て、思わずうとうと眠りこんでしまいました。

そこへサリーさんが現れました。わたくしはやっと安心できる人に会えた喜びで、思わず飛びついてしまいました。

「サリーさん、わたくし思い切ってルーカスさまにどうして選んだのか聞いてみたのですが、余計に訳が分からなくて・・・」

「マリアがしっかりしないとドクトール王国が減ぶわよ。ルーカスは頼りにならないんだから」

「え？」

「将来、王妃になるのだもの。国を背負うということでしょう」

「そんな・・・自分のことですら分からないのに」

「そんなのルーカスだって同じよ。彼、泣いていたわよ」

「本当ですか？」

「嫌われたと思ったんじゃない？」

「そんなこと。ただ想像していなかった未来だからどうしていいのかわからなくて」

「今はまだお城にいればいいだけでしょ？ 楽じゃない？」

サリーさんの問いに、わたくしはうなづくことができませんでした。

するとサリーさんが、キラキラと光る氷の結晶を出してくれました。

「まあ、きれい」

「氷の魔法よ」

「魔法ってなんですか？」

「あら、そんなことも知らないの。今度教えてあげるわ。イアンは鳥人間と行ったけど、あたしはここに残ることになったから、ちょっとは安心なんじゃない？」

「わたくしのそばにいてくださるんですか？」

「そう。当分城で暮らすことになると思う」

わたくしは、思わずサリーさんにギュッと抱きついてしまいました。

「そんなに懐かれたら面倒みるしかないじゃない」

サリーさんの手が、わたくしのモフモフした髪をなでてくれました。

\* \* \*

わたくしが、部屋に戻ると、ルーカスさまが嬉しそうに駆け寄ってきました。お酒の匂いがぷーんと立ち上りました。わたくしは、おもわず顔をしかめてしまいました。

「ごめん、酒臭かった？ 今顔を洗うから、ちょっとまってよ」

慌てた様子のルーカスさまが、あまりにも嬉しそうなので、なぜ自分を選んだのか分からないけれど、好意を信じてみようという気持ちになりました。

サリーさんの提案で、支度を終えたルーカスさまと三人で、中庭を散歩することになりました。

しばらく歩くと、サリーさんが立ち止り、ルーカスさまに向かって言いました。

「喉がかわいたわねえ」

「僕がとってきてあげるよ。ここで待っていて」

わたくしは、わたくしが行った方がいいのではないかと止めようと思いました。しかし、サリーさんの方を見るとルーカスさまが行くのが当然といった様子で落ち着いて待っています。わたくしも大人しく待つことにしました。

サリーさんと二人きりになったわたくしは、気になっていたことを聞いてみました。

「わたくしはサリーさんが大好きですけど、サリーさんはわたくしのことどう思っているんですか？」

「え・・・よくわからないんだよね。神さまが全てみたいで気持ち悪いし」

「そ、そう・・・」

どう受け取ってよいのか迷っていると、ルーカスさまが飲み物を持った召使を連れて戻っていらっしやいました。

「ご苦労！」

サリーさんがそうやって飲み始めると、ルーカスさまがわたくしにも手渡してくださいました。

「さあ飲んで」

わたくしがすすめられるままに飲み始めると、ルーカスさまが自慢げに微笑みました。

「僕、役に立った？」

「ええ、疲れが取れましたわ」

「マリアのためならなんでもするよ」

そうやってわたくしの隣に座ると、ルーカスさまも一緒に飲み始めました。

失礼な感じ方かもしれないけれど、ルーカスさまは本当に子どもらしくてかわいらしい方なのだとはほえましく感じられました。

<城での生活>

結婚してからも、王家のものになったという自覚が湧かないわたくしは、娘時代のシンプルな服を着続けておりました。

ある日、侍女たちが話しているのが聞こえてきてしまいました。

「未来の王妃だというのに、あのかっこうはなんなのかしら。あんな人がわたしたちの主人なんて恥ずかしいわ」

そばには、サリーさんもいました。どうしていいのかわからず、おろおろするわたくしに対してサリーさんがきっぱりと言いました。

「服なんて変えればいいだけよ！」

「でもわたくしの服を買うために国民の税金を使うなんて・・・」

「王家の人間が、それにふさわしい服装をするのは仕事のうちよ。誰も文句はいわないわ。むしろ、今まで誰も指摘しなかったのが不思議～」

サリーさんの手配で、仕立屋が採寸に来てくれました。

ルーカスさまも、わたくしに似合う服を探すことを楽しんでいるようでした。

突然、サリーさんが言いました。

「 MARIA は、赤と金の目が素敵だから、うすい赤に金の縁取りにしよう」

「え!？」

「僕もそう思う。サリーもたまにはいいこと言うよね」

「いつも言っている」

わたくしの戸惑いをよそに、赤と金の服も注文されてしまいました。

仕立屋が帰ると、サリーさんとルーカスさまの三人でお茶の時間にしました。

同じ焼き菓子を取ろうとして、サリーさんと目があってしまいました。

「 MARIA の目って本当にきれいよね。神の祝福だね」

「そんなこと言われたの初めてです。いつも悪魔の目って・・・」

「あら、ニニーム共和国だったら崇められていたわよ。 MARIA もルーカスも、ニニーム共和国に生まれていたら、そのままの姿を認められたかもね」

猫人間の世界に生まれることなど想像もしていなかったわたくしは、どう答えていいのかわかりませんでした。しかし、ルーカスさまを見ると何度も何度もうなずいているのです。

-

結婚しても、コーエン先生は、ルーカスさまの勉強のために部屋を訪れていました。

しかし、ルーカスさまはいろいろな理由をつけて追い返してしまわれます。わたくしはこのままでいいのだろうか疑問を感じました。しかし、何がいけないのかわかりません。わたくしが迷っている間に、先に口を開いたのはサリーさんです。

「嫌でもなんでも、次期王位継承者なんでしょ。少しは学ぼうという気持ちにならないの！」

「だって分からないし・・・でも MARIA が一緒なら授業を受けてもいいかな」

「はあ!？」

「わたくしでよければご一緒させていただきます。ルーカスさま、先生のお話を聞きましょう」

「じゃあ僕、先生を呼び戻してくるよ。待っていて」

そういうとわたくしとサリーさんを残してルーカスさまは走り出しました。

「あたしも王家の授業に興味あるし、受けることにするわ。学校の授業よりはましな内容でしょう」

「ドクトール王国では幼いころより親の仕事を手伝うのが一般的で学校というものはありません。女の子はお母さまのお手伝いをして過ごします。家事を習ったり、讃美歌を歌ったりするんです。ルーカスさまがあれほど嫌っている勉強というものがどんなものか分かりませんが、なんだか楽しみですわ」

「向上心を持つのはいいことよ。分からないことがあったら、先生にどんどん質問しなさい。遠慮しちゃだめよ」

「はい、サリーさん」

ルーカスさまと戻ってきたコーエン先生は、わたくしたちがいるので戸惑っているようでした。しかし、拒否されるよりはよいと考えたのかそれ以上なにも言いませんでした。そして、今問題になっている話を始めました。

「ルーカスさまは、戦いの話が苦手なようなので、女性もいることですし、今日は支援について話し合しましょう」

そういうとわたくしの方を見て、質問されました。

「問題は日々起こり続けています。人々から税金を集めて大きな力を持っている国には、解決する義務があります。たとえば、バナナの輸入で打撃を受けたライ麦畑生産者に対して、マリアさまならどうしたらいいと思いますか？」

「え!？ 困っているのなら、助けてあげたらいいのではないのでしょうか・・・」

「しかし、困っているという理由で助けるなら、他にもいるわけです。たとえば、アニマル連合を組んでいるニニーム共和国の農民はどうでしょう？ 彼らの多くは貧しい暮らしを強いられています。何か異変が起きれば、立ち上がる余力は残されていないでしょう」

「それは・・・」

「もし、放置すれば、戦争の引き金になりかねません。しかし、自国に問題を抱えたまま、隣国を支援することは反対の声も多い。もし、王妃になり陳情を受け付ける立場に立ったなら、マリアさまならどうしますか？」

「せ、戦争になるよりいいので、支援をしたいと思います」

わたくしは思い切って答えました。すると意外なことにサリーさんから反論の声があがりました。

「一方的な支援は支配につながる。物を言えなくなることを恐れて、国民の窮状より国の体面を優先すると思うわ。特にニニーム共和国は独立を尊ぶ気風の国だから。その点についてはどう思うの？」

「嫌がるのを無理に押し付けるわけにはいきませんが、放置することもためられますし、どう

していいのか・・・ルーカスさまはどう思いますか？」

「僕は MARIA が支援したいならするし、したくないならしなくてもいいと思うよ」

そういうとルーカスさまはわたくしに微笑みかけます。しかし、わたくしはそんな曖昧な理由で国の問題を決めてよいのか分からず、うなずき返すことができません。サリーさんを見ると、あきれた様子でため息をついています。コーエン先生を見ると、首を横に振りながら、やっぱりため息をついています。やはりわたくしの気持ち一つで決めてよい問題ではないのだと思い、ルーカスさまにはただ微笑み返すだけにとどめることにしました。

「MARIA さまのお人柄はなんとなくわかりました。想像しているより意見というものををお持ちのようだ。このまま勉強を続ければ、将来王妃になっても陳情に答えられるでしょう。どうですか、ルーカスさまと一緒にわたしの授業を受けてみますか？」

「はい、コーエン先生。よろしく願います」

「MARIA が一緒なら僕も嬉しいよ。明日から楽しみだな～」

「あたしもいるけどね」

こうして散歩とお茶だけだった日課に、勉強の時間が加わることとなりました。わたくしにとって、王妃という立場について考える大変重要な時間となりました。

-

翌日の授業のはじめに、コーエン先生がルーカスさまにおっしゃいました。

「今日は久しぶりに戦術について学びましょう」

「いやだよ～。MARIA がいるんだし、ほかのことがいい！」

嫌がるルーカスさまに対して、サリーさんが言いました。

「なさないわね！ 戦術だって覚えとかなないと王族として恥ずかしいわよ！ MARIA がかわいそうよ！！」

しょんぼりするルーカスさまを見て、コーエン先生が要求を緩められました。

「実戦の話は女性もいることですし、ボードゲームにしておきましょうね」

「あら、あたしは別に具体的なやつでもいいけど～」

そういうとサリーさんは挑発的にニヤリと笑うのでした。なんでも対応できてしまうそんな姿に、わたくしは尊敬の気持ちを深めました。

「まずはわたしたちがゲームをするのを、MARIA さまとサリーさんに見ていただきましょう」

そういうとルーカスさまとコーエン先生はゲームを始められました。コマの動かし方が決まっているようですが、初めて見るわたくしにはさっぱりわかりません。しかし、サリーさんにはどちらが優勢なのか分かっているようでした。そして、ルーカスさまを叱りつけるように言いました。

「もっと論理的に考えなさいよ！」

不思議そうな顔をされるルーカスさまに対して、サリーさんは深いため息をつきました。

「ああもうあたしが相手をするわ。あたしに負ければさすがにルーカスも恥ずかしいでしょうし！！」

そうってコーエン先生と交代して打ち始めるのです。

ルーカスさまもサリーさんも、よどみなく次々手を打っていきます。迷いというものが感じられません。しかし、サリーさんがコマを置いた途端、ルーカスさまが叫びました。

「サリーがそこに置いたら、僕の手が完成しないよ〜」

「そんなの敵なんだから邪魔するに決まっているでしょう。そこをどうするか考えるためにやっているんでしょう！」

「そうなの？ 置く順番を覚えるためじゃないの？」

「そんなことに気づかないなんてバカなの！？」

思わず立ち上がったサリーさんをなだめるように、コーエン先生がおっしゃいました。

「まあ、そこまで言い切らなくても・・・なんとなく分かっているんじゃないのは気づいていましたが、まさかそこでつまづいているとは・・・」

深いため息をつかれるコーエン先生を見て、ルーカスさまは肩身が狭そうです。わたくしは何とかしなければと思いました。

「これから一緒に頑張りましょう。わたくしにできることならなんでもしますから」

「そうだね。 MARIA が一緒ならやれる気がするよ」

自信を取り戻してニコニコ微笑むルーカスさまに向かって、サリーさんが言いました。

「実際の戦闘はもっといろんなことを考えないといけないのよ。順序立てて、優先順位をつけて、誰にでもわかるように指示するってことよ。分かっているの？」

「困ったらサリーを呼ぶよ。僕より上手にやれそうだし」

「あたしはイアンと旅をするの。いつまでもここにいないの！」

「大丈夫。転送装置があればすぐ来られるから」

「自分でできるようになろうと思え！」

「そんなこといったってさ・・・」

対立するルーカスさまとサリーさんの間に入って、コーエン先生がおっしゃいました。

「今はクリス王がいらっしゃるから、焦らず、確実に覚えていきましょう。 MARIA さまと一緒に最初からやり直せば、きっと論理的思考が身につきますよ」

「そうよ。 MARIA に負けたらさすがに恥ずかしいでしょう？」

サリーさんがそう言うと、なぜかルーカスさまは照れたように笑うのです。

「僕が選んだ人はすごいなって嬉しくなるよ」

サリーさんもコーエン先生も、あきれて言葉がでないようです。さすがにわたしもそれではだめなのではないかと思いましたが、ルーカスさまがいいならよいのかもしれないとも思いました。わたくしはルーカスさまに勝った方がいいのでしょうか。勝ってしまうのでしょうか。

## <異変>

俺は、ニニーム共和国を一人で旅していた。

バナナ畑は一面枯れて、異様な光景が広がっていた。

食糧事情を心配した俺は、メルル代表の元を訪ねた。

俺は提案してみた。

「フィッシュ諸島中に広がっているなら、すぐに食べるものがなくなってしまうだろう。ドクトール王国に支援を要請してはどうだろう？」

「いいえ、結構。アニマル連合を組んでいるとはいえ、ドクトール王国は他国。自分の国のことは自分たちでなんとかします」

「しかし」

「先代賢者のように母国を裏切って、ドクトール王国の支配力を増させるようなことをしないでくださいよ」

メリル代表の説得を諦めた俺は、転送装置を使ってラビット城に戻ってサリーに事実を伝えることにした。

「バナナ畑が一斉に枯れている。どこの島でもそうだ。心配なら家に帰った方がいいんじゃない？」

「あたしが帰ったからってバナナがよみがえるわけじゃないし、城に残るわ」

「そうか。俺は各地を調査してからクリス王に事実を報告するつもりだ。どうも鳥人間が来たことと無関係だとは思えない。気になるねえ」

「まあ、あたしがいなくてももしっかりやってよねえ。サドラー家の威光を使いまくっていいから」

裏切りものの弟子として、俺を嫌う猫人間たちの存在を一緒に旅をして嫌というほど感じたサリーは、元気な口ぶりとは裏腹に心配そうな表情を浮かべていた。

\* \* \*

わたしは、王としてバナナが枯れて食べるものに困っているニニーム共和国の人々を助けたいと考えていた。

しかし、商人たちは反対だった。特にアッカーソン氏は猛烈に反対していた。

「国内のライ麦農家の救済をさしおいて、他国の支援など言語道断。彼らのことは、彼らに任せればよい！」

農民の代表はもちろん、庶民の代表の商人や、農民を雇用する立場にある貴族たちもこぞって反対を表明し始めた。

王として、独断で支援を決めることはできる。だが、溝を埋めないまま行えば、再び戦争に発展しかねない。

どうすればよいのか。

説得の言葉が見つからないまま、議会を終わるしかなかった。

\* \* \*

サリーと別れた後、俺はニニーム共和国の小さな島々を歩き回った。

もともと貧しかった上に、突然バナナが枯れたのだ。惨状は想像していたよりもひどかった。

転送装置があっても、他人の土地へ押しかけて、生きていく術を見つけることはできない。しかし、留まれば死ぬとなれば別だ。ポツポツと転送装置でドクトール王国を目指す猫人間が現れ始めた。大量に押しかけるのは時間の問題だろう。

そうなる前に、手を打たなければ。しかし、支援は見送られてしまった。なんといっって説得すればいいのか。なんといっって……。

\* \* \*

わたくしが城を歩いていると、バナナが枯れたという話が耳に入りました。心配になったわたくしは、ルーカスさまに訪ねました。

「ニニーム共和国でバナナが枯れて困っているそうですね。どうしたら助けられるのでしょうか？」

「マリアはそんなこと心配しなくてもいいんだよ。クリス王がなんとかしてくれるから」

噂では、支援は否決されてしまったという。わたくしが口出しすることではないし、何をすればいいのかわからない。でも、何もしないでこのままでいいのかしら。

悩んでいるとコーエン先生の授業で、バナナが枯れた話に取り上げられました。ルーカスさまは、相変わらず無関心そうです。

そんなルーカスさまの態度に腹を立てたサリーさんが、ビシッと指摘します。

「いつかはルーカスがやらないといけないことなのよ。今のうちにしっかり政治を学びなさいよ。せめて会議にでるとか、そういう気持ちはないの？」

「だって僕が出たって役には立たないし……」

コーエン先生と話して、将来は陳情を受けることになると思ったわたくしは、会議というものに興味が湧きました。ルーカスさまならわたくしの頼みをきっと聞いて下さるだろう。そう思うと勇気が湧いて、お願いすることができました。

「ルーカスさま、たしかに今はクリス王にお任せすれば安心かもしれません。でもいつかはわたくしたちが求められることなのですから、会議に出させていただけます。ただ端の方で見させてただけでいいんです。お願いします」

「マリアがそういうなら、見に行ってもいいよ。どうせサリーもくるんでしょ？」

「あたしをおまけみたいにいわないの。ルーカスのくせに」

王子という立場でありながら、サリーさんに呼び捨てにされても怒るわけでもなく、ルーカスさまはむしろ楽しそうでした。わたくしもサリーさんのように、ハキハキと話すことができたらどんなにいいだろう。二人を見ているといつもそんな風に感じてしまうのです。でもやっぱり叩かれるのが怖くて、お母さまの言いつけを破ることも怖くて、どうしてもサリーさんとルーカスさまとコーエン先生以外に意見を言うことはできません。

そんなことを思いながら、会議室にいるクリス王を訪ねると、温かく迎えてくださいました。隣に席を作ってくださいって、報告が聞こえるように気をつけてくださいました。

ちょうど押し寄せた猫人間が、仕事を求めて城下町の入り口で座り込みをしているという報告を受けているところでした。

猫人間の中には、仕事を紹介するとだまされて、お金を取られた人も出てきたらしく、激しい調子で犬人間の酷い仕打ちを訴えているそうです。

それに対して、アッカーソン家を代表とする商人たちは、猫人間締め出しの申し合わせを決定したようです。なかには、以前から雇われていた城下町に住む猫人間の仕事まで取り上げてしま

う犬人間もでてきて、混乱に拍車をかけているようです。

対立が激しくなるほど、お互いへの不信感が増していきます。

ラビット城周辺には、王とともに悪い魔術師を倒すために戦った戦士の末裔が多いため、武装して駆けつける犬人間も出始めたということです。

城下町の中では犬人間の兵士が、外では大量に押し寄せた猫人間の難民が、さらに外には武装した犬人間の元戦士が取り囲んでいます。新たにやってくる猫人間は、武装した元戦士に阻まれて、仲間と合流することができません。彼らは配給の食糧も受けることができず、空腹に苦しんでいるといいます。このままの状況が続けば、餓死者がでて不思議ではありません。

報告を聞き終えると、クリス王は立ち上がりました。

「再び戦争になることだけは回避せねば。なんとか・・・」

そういうとクリス王はパタリと床に倒れ込んでしまいました。

兵士たちが助け起こそうとしましたが、意識が戻りません。ピクリとも動かない様子に、周りの人々がざわつきはじめました。

ルーカスさまは、横たわるクリス王の隣で膝をつき、手を握って必死に呼びかけています。

「どうしたの。返事をしてよ～」

わたくしも、心配でルーカスさまの後ろに立ち、クリス王の顔を覗き込みます。

カッと見開いたままの瞳孔は暗く、意識が戻る様子はありません。

医療の心得もあるらしいサリーさんが言いました。

「これだけ呼びかけても意識が戻らないとなると、脳か心臓に異変があったのかもしれない。手当を急いだ方がいいわ」

すると王家のお抱え医師が現れました。兵士たちに指示をして、クリス王を寝室に運ぶことになりました。

ルーカスさまがついていこうとします。わたくしもあとに従おうとしたところ、サリーさんに止められてしまいました。

「クリス王が倒れた今、兵士たちに指示を出せる人間はルーカスしかいない。ここに残るべきよ」

その言葉を聞いて、わたくしたちは戸惑ってしまいました。いつか継がなければならない役目とはいえ、それはずっと先のことだと考えていたからです。今すぐ求められても、わたくしたちにどうにかできるのでしょうか。

コーエン先生に聞いた話によると、王位継承でもめることがないように、クリス王は結婚しなかったそうです。妻や子を持ちたかったかもしれないのに、ご自分を犠牲にして、国を守ろうとした心意気に、王という立場の重さを感じてしまいます。

少し休まれば戻ってこられる。そう思っていた。しかし、1時間たっても意識は戻りませんでした。

連日連夜、不眠不休で対処してきた疲れが出たのでしょう。倒れるまでお一人ですべてを背負ってこられたことを目の前で見せられたわたくしは、申し訳なきでいっぱいになりました。少しでも休んでいただきたい。そう心から思いました。

「意識がもどられてもしばらくは絶対安静です」

医師からそう告げられると、兵士たちがルーカスさまを取り囲んで言いました。

「今からルーカス王子に指揮をとっていただかなければなりません。どうぞ我々にご指示を！」

「僕に言われたって分からないよ。どうしよう Мария」

「わたくしにもどうしていいのか・・・」

「僕は弱い。 Марияだけがそれを認めてくれた。僕には本当にどうしていいのか分からないんだ。そんな僕に王なんて勤まるはずがない。助けてくれ Мария」

そうか、あの時、わたくしが"弱虫"と言ったから、ルーカスさまはわたくしを選んだのだわ。

本当にルーカスさまは、頼りなくて、かわいらしい人だ。何とか助けてあげたい。でもわたしにもどうしたらいいのか分からない。それに、王子でないものが、王子のように振る舞っては混乱させるだろう。わたくしは妻なのだから、口出しするわけにはいかない。

「ルーカスさまが王子なのですから、思うとおりになさったらよいと思います」

「僕は何も思っていないよ。君たちはどうしたらいいと思う？」

ルーカスさまが兵士たちにたずねられました。すると兵士の一人が、手を挙げて答えました。

「押しかけてきた猫人間への攻撃を許可していただきたい！」

「僕よりよくわかっている君たちが言うのだから、そうしたらいいんじゃないかな」

わたくしはそれは違うのではないかと思いましたが、口に出して言うことはできませんでした。

王の代理として、会議室に籠っているルーカスさまから離れて、久しぶりに一人になったわたくしは、城の礼拝堂に籠りました。そして、神に問いかけました。

「わたくしは王子ではありません。だから意見をいう立場にありません。でも困っている猫人間を攻撃することは本当に正しいことなんでしょうか。神さまどうしたらよいのでしょうか？」

しかし神さまは何も答えてはくれません。重い沈黙が流れました。

沈黙を破ったのは、いつのまにかわたくしの後ろに立っていたサリーさんでした。

「 Марияは攻撃に反対なのでしょう？ それならどうしてルーカスにそう言わないの？」

「決める立場にはないので、言うてはならないと思います」

「誰だって正解なんて知らない。それでも動かなくちゃならない時はある。失敗が怖くない人間なんていると思うの？」

「でも王子ではないのに！」

「王子になっただけで答えが分かるくらいなら、ルーカスは悩んだりしない。ルーカスのために Марияにできることがあるんじゃない？」

ルーカスさまは、会議室でどうしているのだろう。分からなくて困っているのではないかしら。

「わたくし、ルーカスさまのところに参ります」

腕組みをして見送るサリーさんを残して、わたくしは駆け出しました。

\* \* \*

俺がラビット城に戻ると、兵士たちが戦いの準備をしていた。

クリス王が倒れて、ルーカスが兵士たちに攻撃を許可してしまったらしい。

俺は、ルーカスのいる会議室へ急いだ。

するとマリアさまが先に会議室に走り込んでいった。

俺が入っていくと、ルーカスがマリアさまの手をとり、泣いていた。

それを見た兵士たちが、あからさまに侮蔑の表情を浮かべている。

俺は、深刻な事態になってしまったことを悟った。

「待て、彼らは困っているだけだ。攻撃の意志はない。こちらから攻撃を仕掛けてはならない！」

「もう決まったことだ」

兵士たちが立ち上がり、会議室を出ていった。

残されたルーカスとマリアさまは、俺のところに駆け寄ってきた。

「僕、悪いことしちゃったの？ どうしたらよかったんだろう？」

「猫人間である俺の言うことは聞かないだろう。クリス王が復活されたら指揮を立て直せるかもしれないが」

「ルーカスさま、わたくしとともに神に祈りを捧げましょう。クリス王の復活を願いましょう」

「そうだね。そうしよう」

床に膝をつき、ルーカスとマリアさまが熱心に神に祈りを捧げた。こんな時でなければ、仲のよさを喜べたのに。

感傷に浸っていると、兵士が入ってきて告げた。

「クリス王が、亡くなられました」

これですべてがルーカスの肩にかかってしまった。俺は絶望的な気持ちになった。

\* \* \*

僕は、イアンさまの話を聞いて、間違っただけを許してしまったのではないかと不安になってきた。

しかし、もう兵士たちは動き出してしまったし、これで正しかったのだろう。

正しかったと思いたい。

「僕は間違っていないよね」

僕はマリアがうなずいてくれることを期待した。しかし、マリアは困ったように首をかしげるだけだった。

「何か言ってよ。不安でたまらないよ」

「どうすることが一番いいのか、わたくしも考え続けています。でも答えがみつからなくて」

僕は、本当に大変なことになったと心から恐れた。

\* \* \*

あたしは、イアンに頼まれて城下町の入り口に集まってきた猫人間たちに紛れ込んだ。

とうとう以前から城下町に住んでいた猫人間たちが、着の身着のまま追いついて、城門の外にいる猫人間の群れと合流させられた。

すると追い出された猫人間のリーダーらしい男が叫んだ。

「これが犬人間の正体だ。同じ尻尾を持つもの同士などという同情心は欠片もない。猫人間が死に絶えてもなんとも思わない！」

同調する声がかんたん広がっていった。その様子を確認すると、男は再び口を開いた。

「このままだまって死ぬのか。いや、我々には魔術の力がある。少しでも魔術をつかえるものは、力を貸してくれ。奪われた尊厳を取り戻すんだ！」

このままでは争いが始まってしまおうだろう。

イアンに報告するために、こっそりと抜け出しラビット城に戻っていった。

すると青白い顔をしたマリアが一人で立っていた。

あたしを見つけると、飛びついてきた。

「サリーさんは、外の様子を見てきたのでしょうか？ どうでしたか？」

「城下町に住んでいた人も追い出されて、とうとう犬人間への魔術による反撃を決断したわ」

「彼らはこの国を乗っ取りにきたのでしょうか？」

「猫人間にとって、この国は寒すぎる。好き好んで住むのは、目的がある人だけよ。イアンとかね」

「神さまは、困っている人を助けるようにおっしゃっています。わたくしは彼らは助けるべき相手なのではないかと思います」

「猫人間だから言うわけじゃないけど、イアンも賛成してくれるんじゃない。あたしも同じ意見だけど」

「わたくし、ルーカスさまを説得してきます」

そういうと振り向きもせず、マリアは真っ直ぐ駆け出して行った。

## <決断>

わたくしは、部屋に戻り、ルーカスさまに訴えかけました。

「どうにかして兵士たちを止めましょう。猫人間たちはただ困っているだけです。敵ではありません」

「マリアがそういうなら、僕、止めてくるよ」

わたくしとルーカスさまは、手をつないで、兵士たちが集まる広場に駆けて行きました。

兵士たちの前に立つと、ルーカスさまは大きな声で言いました。

「攻撃命令は撤回する。やめてくれ！」

「攻撃されてからでは遅いのだ。被害が出たら、どう責任をとるおつもりなのですか！」

「それは・・・」

「何の覚悟もない弱虫は黙っていればよい。戦いは専門家である我々に任せるべきだ」

ルーカスさまに背を向け、兵士たちが広場を出て行ってしまった。

あきらめるしかないの？

いいえ、まだできることはあるはず。

あきらめてはいけない。

わたくしはイアンさまを探すために、ルーカスさまを連れて駆け出しました。

\* \* \*

再び城下町の入り口に戻ったあたしは、武装した兵士がとうとう来てしまったことを知った。

イアンなら、戦いを解決するための方法を思いつくかもしれない。

眠りの魔法をかければ、一時的には争いが回避できる。

しかし、眠らせ続けることはできないし、一人でも掛け損なえば無防備なまま殺されてしまうだろう。

難しい局面に立たされている。

しかし、イアンの役に立ちたい。いや、役立ってみせる。

あたしは、魔法をかけるタイミングをはかるため、当たりの様子に集中した。

\* \* \*

俺を見つけたマリアさまは、叫ぶようにいった。

「兵士たちは出て行ってしまいました。しかし、ニニーム共和国の代表を説得できれば、状況が変わるかもしれません。どうか、会いにいらしてもらえませんか？」

俺一人では厳しいだろう。誰か、口添えをしてくれる人がいれば・・・そうだサドラー氏ならメリル代表を説得できるのではないか。

「いいでしょう。俺が行って説得してみます」

「お願いします」

頭を下げるマリアさまにつられて、ルーカスも頭を下げた。

転送装置でシャーク島に飛んだ俺は、サドラー氏の元を訪ねた。ニニーム共和国で一番たくさんバナナ畑を持つサドラー家は、大打撃を受けていた。しかし、カカオが無事だったため、なんとか経営を維持しているようだ。

「イアンさまですか。お久しぶりです。あの時はお世話になりました。ついていったサリーは元気にしていますか？」

「元気ですよ。今、すごく頑張っていると思います。実は、サリーのためにもお願いしたいことがあって来たのですが」

「なんでしょう？」

「メリル代表を説得するのに協力してもらえないでしょうか？」

「うちの使用人もかなりの数転送装置でドクトール王国へ行ってしまった。無関係とは言えない。いいでしょう。一緒にホエール島へ行きましょう」

「ありがとうございます」

サドラー氏を連れて、再び転送装置を使って、ホエール島のメリル代表を訪ねた。

「これは珍しい組み合わせですね」

俺は要求を率直に述べた。

「このままでは再び戦争が始まってしまう。食糧さえ支援されれば、転送した猫人間たちは自分の国に帰ってくるでしょう。だから、支援を求めませんか？」

「そして、犬人間たちの支配を許すつもりなのか？」

様子を見ていたサドラー氏が、口をはさんだ。

「属国にならぬように、我々領主が力を尽くそうではありませんか。そのためには、まずは転送したものを連れ戻して、独立国としての体面を保つことが必要なではありませんか？」

口出ししない方がうまくいくと判断した俺は、サドラー氏にすべてを託して、結果を待つことにした。

\* \* \*

わたくしはルーカスさまをつれて、アッカーソン氏を探していました。

すると突然、ルーカスさまが立ち止ってしまいました。

「やっぱり心配だ。僕らもニニーム共和国へいこう」

「イアンさまでだめなら、わたくしたちにどうにかなることではありません。信じて任せただから、待ちましょう。どんな結果になっても受け入れましょう。それにわたくしたちには国内の意志を統一するという役割があります。商人たちの代表者であるアッカーソン氏に会って、ニニーム共和国へのライ麦支援を承諾してもらいましょう」

「わたしを探しているというのは、そういう訳か。いかにも女が考えそうな甘い考えだ」

現れたアッカーソン氏が、わたくしを睨み付けた。後ろにはアビゲイルさんもいます。しかし、わたくしはひるみませんでした。

「ライ麦を買えば、ライ麦農家が助かります。ライ麦を支援すれば、お腹をすかしている猫人間たちが助かります。双方を丸く収めるもっともよい方法です」

「だが、ライ麦を買うには金がいる。その資金はどこから出るのか。われわれ国民の税金ではないか。結局、ニニーム共和国のやつらに、我々の金を与えることになるのだ」

「戦争が起これば、やはり資金が必要です。同じお金を使うなら、支援に使って何がいけないのでしょうか」

「言わせておけばこの女は！」

アッカーソン氏がわたくしに向かって拳を振り上げました。するとアビゲイルさんが前に出てきました。

「だめですわ！ お父さま！ 力で押さえつけてはいけません。それでは独裁者になってしまいます」

しかし、アッカーソン氏は怒りを抑えることができないのか、わたくしに向かってきました。するとそれまでわたくしの隣でおろおろとやり取りを見守っていたルーカスさまが、間に入って代わりに胸を殴られてしまいました。

「僕の MARIA をいじめるな。MARIA は間違っただけとは言っていない。僕は王として、MARIA の言うことを聞く！」

「兵士たちを束ねられなかったあなたに、商人や貴族たちを束ねられますか？」

「MARIA がいればできる！」

「それではその女が王ではないか。あなたの存在になんの意味があるのです」

高笑いをするアッカーソン氏に対して、わたくしは生まれて初めて怒りを感じました。

「あなたは自分が儲けたいから言っているだけです。本当に国を思っているのはルーカスさま

です」

騒ぎを聞きつけた兵士たちが、アッカーソン氏を取り押さえました。

するとアビゲイルさんがわたくしに膝をついて言いました。

「今の、いえ今までの無礼を謝罪しますわ。今、この時からアッカーソン家の当主はこのアビゲイル・アッカーソン！」

それを聞いたアビゲイル氏が叫びました。

「そんなこと許さんぞ」

取り押さえられて身動きのできないアッカーソン氏に対して、アビゲイルさんが鋭い一言を浴びせかけます。

「お父さま！ 暴力に訴えたあなたを当主とは認めませんわ。アッカーソン家は農民に寄り添う商人ですもの。先代の名に恥じぬ存在であるために、ニニーム共和国への支援もいたします！」

そう宣言すると、兵士たちに言いました。

「さあ、王族に手を上げたその男を連れて行って」

「わたしを見捨てるつもりなのか」

「親子の情より家を守る。当主として当然の選択ですわ」

突然の当主交代劇に戸惑いながらも、支援の約束を取り付けられてほっといたしました。

「ドクトール王国の代表者たちには、わたくしから支援の約束を取り付けておきます。マリアさまは、ルーカスさまの傷の手当てを」

そういうとアビゲイルさんは颯爽と去っていきました。

手ごわかった人が味方になってくれて嬉しくなりました。

部屋に戻ると、ルーカスさまが上着を脱ぎました。胸に赤いあざがくっきりと浮かんでいました。召使が持ってきた冷たい水で濡らしたタオルで冷やしました。

ルーカスさまがわたくしを安心させようとおっしゃいました。

「大丈夫。痛くはないから」

「わたくしの判断で動いてしまいましたが、次の王であるルーカスさまも結果に対する責任を問われるかもしれません」

「そんなこと心配しなくていいんだよ。マリアがいいと思うなら、僕は賛成するよ」

「いいえ、ルーカスさま。わたくしが間違っていると思うときは、遠慮なくそうおっしゃってください。それでこそ夫婦ではないかしら」

「分かった。遠慮なく言うよ。でも今のところ僕はマリアが間違っているとは思わないよ。だから自信を持って。責任は王になる僕が取るから」

わたくしは、ルーカスさまの信頼を心から有りがたく感じました。この人を助けたい。そう思いました。

\* \* \*

あたしは、魔法をかけるために、できるだけ集団の中心に近づいた。その時、戦いを告げる魔法の火花が上がった。

イアンを信じて、全神経を注いで、犬人間と猫人間の群れに眠りの魔法をかけた。

天才児のあたしにかかれば、一人残らず眠らせることはたやすい。しかし、これだけの人数を眠らせ続けるには限界がある。

どこまで耐えられるか。

勝負だ。

\* \* \*

わたくしとルーカスさまは、会議室でイアンさまの帰りを待っていた。

するとメリル代表を連れたイアンさまが戻ってこられた。

「猫人間たちには帰ってもらう。そのかわりに支援をする。痛みを分かち合う。そういう方向でまとまった。サドラー氏のおかげだ」

そういうとイアンさまは、わたくしたちに背を向けました。

「最前線に飛んで、俺が決定を伝えてくる！」

「わたくしもいきます！」

「僕もいくよ」

わたくしの腕をつかむルーカスさまに、優しく微笑みかけながら言いました。

「いいえ、ルーカスさまは次の王だもの。危険な場所には来ないでください」

ルーカスさまの手を振り切り、イアンさまのあとに続いて、わたくしは転送装置に飛び込みました。

\* \* \*

城下町の入り口の脇に転送されると、辺り一面、立ったまま眠る武装した犬人間の兵士たちでいっぱいでした。

城壁に囲まれているため、城下町の出口は一つしかありません。そこにみんな向かって進もうとしていたようです。

イアンさまをみると、出口を抜けて猫人間たちの群れの方に向かっていきます。わたくしもあとに続いて走りました。

すると今にも倒れそうなサリーさんの姿が見えました。その後ろには、立ったまま眠る猫人間の群れが見えます。猫人間たちもやはり入口を目指しているようです。

サリーさんがわたくしたちに気づきました。

「遅いわよ！」

「話し合いはついた。魔法をといて。俺が結果を伝える」

「無理よ。聞く耳を持たないわ。起きたら最後、殺し合っちゃうにきまっている」

「幸い城下町の入口にはまだ誰も到達していません。わたくしが入口に立って犬人間と猫人間の衝突を防ぎます」

「そんなことしたら、マリアが死んじゃうよ！」

「大丈夫です。神さまの力をお借りします。讃美歌を歌ったら、きっとみんなの注意をひけますわ。だからわたしが歌い出したら、魔法をといて！」

わたくしは讃美歌を歌い始めました。

サリーさんがイアンさまを見ている。うなづくイアンさま。

「どうなってもしらないんだから！！」

魔法が解除された途端、サリーさんは地面に倒れ込みました。

わたくしは、できる限り心をこめて歌い続けました。戦いをやめてほしい。それだけを願いました。

意識を取り戻した人々が、状況が飲み込めずにあたりを見回していました。

歌い終わったわたくしは、一人ひとりの顔を見詰めるように、ゆっくり見回しながら訴えかけました。

「みなさん、わたくしの話を聞いてください。わたくしは犬人間の王家のものとしてお願いします。どうか攻撃をやめてください。戦っても問題は解決しません。ともに生きる道を探しましょう。バナナが枯れて困っている猫人間のみなさんにはライ麦を支援します。だからどうかニニーム共和国にお帰り下さい」

猫人間の集団の最前列に立っていた男が叫んだ。

「バナナが枯れて輸入できなくなれば、再びライ麦が必要とされる。俺たちにまわす余裕などない。みんな騙されるな！」

「いいえ、ライ麦は保存することができます。ずっと豊作でしたから、みなさんにお配りできるだけの量が十分あります。だから安心してください」

猫人間たちがざわつき始めました。本当は寒いドクトール王国より、暖かいニニーム共和国で暮らしたいはずです。あとちょっとで説得できそうです。でもなんとはいえいいのか。

「俺たちは家を処分してニニーム共和国からドクトール王国に飛んできた。もう帰ってもなにもない。だからここに残してくれ」

そんなことを言われるとは想像していなかったわたくしは、一瞬、戸惑ってしまいました。でもわたくしは未来の王妃なのですから、訴えに答えなければなりません。わたくしは、一生懸命言葉を紡ぎました。

「わたくしは今日まで、従うことこそ美德だと思って生きてまいりました。しかし、王家の人間になり、訴えを聞く立場になりました。コーエン先生に指導していただいているとはいえ、まだまだ未熟です。世間知らずです。神のように偉大にはなれませんが、みなさんのそばにいる、よりそう王妃になりたいと思っています」

あたりにいる人びとが、痛いほどわたくしの言葉に意識を集中しているのが分かります。クリス王はいつもこの視線に耐えてこられたのでしょうか。そして、これからはルーカスさまとともにわたくしも耐えなければならないのでしょうか。

わたくしは、確かめるように、ゆっくり、はっきりと結論を述べました。

「確かに苦しい状況ですから、食べ物のある場所に行きたい気持ちは分かります。しかし、いったん全員ニニーム共和国に帰っていただきたい」

犬人間たちからは拍手が、猫人間たちからは抗議の声があがりました。

「あなたがたには、枯れてしまったバナナ畑を再建するという役割があります。逃げ出しても、それで終わりにはなりません」

すると猫人間の一人が手を上げて叫んだ。

「俺たちの土地じゃない。領主の土地だ。どうなったって知ったことじゃない！俺たちが死に  
そんな目に遭ってもなにもしてくれなかったくせに」

同調する猫人間がたくさん現れて、犬人間たちが警戒しはじめた。

「犬人間の兵士のみなさん、待ってください。もう少し猫人間のみなさんと話をさせてください」

わたくしは必死に言葉を探しました。

「ドクトール王国とニニーム共和国は、アニマル連合の仲間です。転送装置が設置されて、より  
自由な移動が可能になりました。ドクトール王国に住む猫人間もいれば、ニニーム共和国に住む  
犬人間もいます。だから、わたくしは猫人間がドクトール王国に来ることに反対しているわけ  
ではありません。しかし、これだけ大勢の人が、一度にいらしても、住む場所や仕事を確保するこ  
とはできないでしょう。すべての土地には所有者がいますから、勝手に住みつかれても困ります  
。法を守らない人に食糧を支援することもためられます。法を犯すことを認めているようなも  
のですから。しかし、きちんとした手順を踏んで、行き先を見つけた上で来られるなら受け入れ  
ます。それが未来の王妃としてのわたくしの回答です。そしてできることならニニーム共和国に  
とどまり、母国の発展のために働いていただきたい。その方が、お互いのためです。なぜなら、  
ドクトール王国だけが栄えるより、ニニーム共和国も栄えた方がいいからです。そのための支援  
なら惜しみません。貧富の格差を解消して、亡きクリス王の念願だったライフ国際連盟と一緒に  
加入しましょう！」

わたくしは猫人間たちの反応を待ちました。

ニニーム共和国で暮らせるものなら帰りたいという声。

逃げ出した俺たちを、雇い主である領主が許さないだろうという声。

帰りたいが、帰れない。

そう思っている人が大半であることが伝わってきました。

するとイアンさまが、猫人間たちに叫びました。

「今、ドクトール王国にメリル代表が来ている。君たちを迎えにきたんだ」

すると転送装置を使ったのか、ルーカスさまとメリル代表が現れました。

「ニニーム共和国を逃げ出した君たちの罪は問わない。領主たちも迎える準備をしている。だから  
戻ってきてほしい」

メリル代表がそう言うと、猫人間たちが両手を上げて攻撃の意志のないことを示し始めました  
。

それでもまだ武器を構える犬人間たちに向かって今度はルーカスさまが言いました。

「僕は次の王として命令する。猫人間たちを攻撃してはならない。どんなことになってもすべての  
責任はこの僕が取る。だから今すぐ城に帰るんだ」

そのお姿は堂々としていて、王としての威厳というものがありました。少しの迷いもありません。

兵士たちは、武器を下し始めました。そして、ラビット城に帰っていきました。

決着がついたことを悟ったイアンさまが、倒れているサリーさんに駆け寄り手当しました。

「歴史の教科書に一番の功労者として名前を残してもらわなくちゃ！」

「確かに、サリーがいなかったら無傷ではすまなかつたらう。よくやってくれた」

「どう？ 役に立ったでしょう？ 優秀な助手でしょう？」

「そうだね。でも前からそう思っていたよ」

サリーさんはすごく誇らしそうでした。

兵士たちが遠ざかるとルーカスさまがわたくしのそばに近づいてきました。

「大丈夫？」

「大丈夫です」

「止められていたのに、マリアのことが心配でついてきちゃった。ごめん。怒っている？」

「いいえ、来てくれてよかったですわ」

ルーカスさまがわたくしを抱き寄せました。

### <戴冠式>

後日、戴冠式が催され、ルーカスさまは正式に王と認められました。

マリア王妃となったわたくしは、ルーカス王と二人でドクトール王国を守っていくという決意を込めて、ラビット城のバルコニーから集まった人々に手を振りました。隣にはサリーさんもいます。

演説を促されたルーカスさまが、困ったようにわたくしに言いました。

「僕、なんて言っているかわからないよ。マリアが言ってよ」

「ルーカスさま、それでは誰の戴冠式かわかりません。ただ一言、国民のためにマリアとともに尽くします、だけでいいですから、自分の口からおっしゃってください」

それだけでは足りないと思ったのか、サリーさんがさりげなくルーカスさまに助言されます。

「まあ正直ルーカスになにか言われるよりマリアの方が説得力があるわよね。一番頑張っているのはマリアだし。ルーカスは一言だけであとはマリアに任せたら？」

「一言なら僕でも頑張れそうだよ」

前に進み出られたルーカスさまが、バルコニーの下に集まった人々に向かって、わたくしが考えた言葉を堂々と大きな声でおっしゃいました。

「僕はこれから国民のためにマリア王妃とともに尽くします！」

言い終わるとほっとしたように元の場所に戻ってきました。

続いてわたくしが前に出てみなさんに挨拶をしました。

「わたくしは、アモス王が平和を勝ち取りアニマル連合が出来た後に生まれました。ですから、戦争というのを知りません。平和を当然のこととして受け止めてまいりました。しかし、クリス王のご苦勞を自分の目を見て、平和を維持することがいかに大変か知りました。わたくしたちはまだ若く、アモス王やクリス王のように偉大ではありません。しかし、平和の大切さだけはよく分かっているつもりです。ドクトール王国のみなさんが、安心して生きられるように、ルーカス王とともに力を尽くしていきたいと思ひます」

わたくしが元の場所に戻ると、バルコニーの下から拍手が沸き起こりました。

隣を見るとルーカスさまがわたくしに微笑みかけています。心から幸せに感じて、わたくしも微笑みかえします。

神に誓った言葉が、今、本当になったのだと実感したわたくしは、ルーカスさまと生きていく未来を楽しみに感じていました。

## 第7章：マリア伝説

---

目をキラキラ輝かせる女の子。

「マリアさまかっこいい」

「そうだね。この国をつないだ偉大な母だね」

「わたしもマリアさまみたいになれるかな？」

「自分の判断を信じる勇気を持てたら、きつとなれると思うよ」

「うん、頑張る」

「それじゃあ、そろそろ教会にいこうか？」

「はい」

女の子とお母さんは、手をつないで部屋を出ました。